ティリチミール北壁初登攀

平　出　和　也（石井スポーツ所属）
中　島　健　郎（石井スポーツ所属）

ティリチミールは、パキスタン北西辺境を代表する山で、麓の町チトラルからもよく見える。山からの恵みを受けて生活をしている地元の住民の中では、多くの神話や迷信が育まれてきた。「あの山の頂は、妖精が住まう城である。その妖精を守っているのが氷河の裂け目に住んでいる大きなカエルで、山に登ろうとする者は、そのカエルに食べられるであろう。」なんともユーモアたっぷりの神話であるが、それほど人々の生活に根付いた山であった。

そんな有名な山なのに、未だに手付かずで残されていた北壁が今回の挑戦の場である。

平出は21年前の2002年、パキスタンに一人旅した際にチトラルからティリチミールを遠望した。帰国してから早速、過去の文献や地図から空白の北壁の存在に気づいた。まだインターネットがさほど普及していなかったので最新の情報は検索できず不明だった。ともあれ未熟な登山家だった当時は目標にもならず、夢として頭の片隅にしまい込み長い年月が流れた。2017年にシスパーレを登った際にやっとフンザ周辺の登山に一区切りが付いたと思い、やっと新しいエリアに目が向くようになった。

ティリチミール（7,708m）はアフガニスタンとパキスタンにまたがるヒンドゥークシュ山脈の最高峰である。パキスタンにある山だが、アフガニスタンとの国境が近いため、2001年のアメリカ同時多発テロ以降、この地域での観光や登山の許可は出ていなかった。2016年にフランス隊に登山許可が出たものの、再び閉ざされてしまっていた。そんな時、現地エージェントから「チトラル周辺の観光許可が出たので、ティリチミールの登山許可も出るだろう」との情報が入った。

その翌年の2019年に早速、我々はパキスタンへ向かった。現地で２週間ほど待ったが残念ながら許可は出なかった。その代替案としてラカポシ南面の登山へと切り替えた経緯がある。翌年こそはティリチミールへ行こうと、荷物を現地にデポして帰ると、新型コロナウィルスの流行。結局この山へ向かう準備が整ったのは2023年夏となった。

その後もこの北壁が静けさを保ち続けた理由は単純で、簡単に近づけないからである。ティリチミールとひとことで言っても主峰、東峰、西峰、北峰など合わせて7,000m峰が６つあり、周辺の6,000m峰を合わせて一つの大きな山塊となっている。その山塊が大きな城のようになっており、北壁は要塞に囲まれた中に潜んでいた。要塞と言っても山なので全てが砦に囲まれているのではなく、ちゃんと門（谷）はある。しかし、その門が今まで人を遠ざけてきた要因であった。この門は下部ティリチ氷河にあるが、標高差1,000m近いアイスフォールによって閉ざされていた。谷は花崗岩の岩峰に挟まれ、狭く急激に落ち込んでいるため、氷河は掃き出されるように頻繁に崩れる。1967年にチェコ隊が一度通過しているが、それ以降の記録はない。この時代に、未だ空白の地が残されているというだけでワクワクする。ならば実際に行って確かめてみるしかない。

2023年６月19日、我々はパキスタンの首都イスラ

マバードに降り立った。６月22日、チトラルへ向けて出発する。今は週一便しか運行されていないプロペラ機の国内線だが、タイミングよく、天気も良好で飛び出した。出発すると１時間もかからないので、陸路の８時間を考えると楽チンだ。空港には2019年に一緒にラカポシへ行ったガイドのアランが迎えに来てくれた。あの年はティリチミールを登ろうとしていたので、チトラル出身のガイドにお願いしたのだが、結局許可が出なかったのは冒頭で話した通りだ。久しぶりの再会に喜ぶ。街からはティリチミールがよく見えているが、それは南面。我々が向かう北壁は裏側になるものの、ようやく近づいてきたと思うだけでワクワクしてきた。

チトラルは標高1,500mだが、日中の日差しはイスラマバードと変わらず強く暑い。街の男性はアフガニスタンの帽子（パコール）を被り、ナンを食べる。国境に近いだけでなく、最も近い都市はアフガニスタンのジャララバードである。同じ北西辺境州のペシャワールへ出るよりも、アフガニスタンへ行った方が早いため、その文化が深く根付いている。我々にとって嬉しいのは、美味しいアフガンBBQが安く食べられることだ。ベースキャンプに入ったら、新鮮な肉は食べられなくなるので、今のうちに食い溜めしておく。食事は床に絨毯を敷いて料理を並べて食べるアフガンスタイル。頼んでもいないナンは絶対に出されるので食べ過ぎに注意が必要だ。一人400円もあればお腹いっぱいになるので、イスラマバードの物価に比べると半額ほどだ。



写真①チトラルからティリチミールを望む　提供/石井スポーツ

荷物が揃ったら、ポーターに背負ってもらう重量（25kg）に分けてパッキングする。今回はキャラバンに入る前に、順応を行った。現在はティリチ川沿いに道路が整備されてショグロムまでジープで入れるが、昔はザニ峠という3,840mの峠を越えて行くしかなかった。そのザニ峠に現在は水路開発のためにジープ道が付けられているので、車で順応ができてしまう。いいのか悪いのか微妙なところだが、我々は現代の力を借りて、一気に峠へ到着した。景色は素晴らしく、ティリチミールの東峰が綺麗に見える。この峠に２泊して順化を図る計画だ。4,300mの小ピークなどを歩き回りながら初期の高度順化を済ませた。トレッキングがスタートするショグロムへは歩いて向かった。

６月30日、ようやくベースキャンプへ向けて出発する。朝からゾロゾロとポーターが集まり、27名とポーター頭１名の計28名となった。今回は映画制作をしたいというディレクターがベースキャンプまで同行するため、現地スタッフ合わせて合計５名。約１ヶ月生活するのに必要な荷物と登山装備を合わせると620kgになった。ポーターの費用はベースキャンプまで片道一人＄60。初日は平坦な道のりなので、ロバを使う人もいれば、子どもに手伝わせる人もいる。基本的にポーター業を生業にしている村人はいないので、たまにある臨時収入としてそれぞれ楽しんでやっている雰囲気だ。左岸から右岸へ渡り、川沿いに歩く気持ちの良いトレッキングだ。緑の大地に茶色の岩肌、空の青とダイナミックな風景が広がる。初日は５時間程度でシェルニアクへ到着。林が茂ったキャンプ場はここまで。豪快な焚き火と濃い

空気のもと、コックさんによる初めての食事が振舞われた。犠牲祭でいただいた新鮮なマトンを残しておいてくれたおかげで、絶品のマトンカレーを堪能した。

7月1日、出発して1時間ほどで氷河へ上がる。アップダウンやクレバスの迂回などがあるものの、ポーターについていけば難しい箇所はない。トレランシューズでも十分歩ける。氷河のクレバスが増えてきたあたりで左岸に移ると広い河原に出てショゴールに到着する。本日の行動時間も5時間半ほど。

いよいよ懸案のアイスフォールとご対面。セラックの崩壊跡が無数にあるが、その崩壊のおかげでルートが繋がっているようにも見える。ただ、これほどまで新鮮な崩壊跡が広範囲に広がっているアイスフォールを見たことが無い。白と青の硬い氷の塊が、太陽に照らされて輝いている。少しの迷いはあったが、二人とも同じ意見であった。ここは通れない。北壁への最短経路ではあるが、あのアイスフォールに何時間も身を置くのはあまりにもリスクが高い。そこで用意していたプランBに変更した。急がば回れ。

7月2日、ショゴールを出発し、上部ティリチ氷河の緩やかな左岸のサイドモレーンを上る。3時間半ほどでイストルオナールBC、さらに1時間歩くと下部バブーキャンプに着く。本来のバブーキャンプは更に20分ほど登った場所にあるが、風が通り、吹きっさらしになっているので快適ではないとのこと。下部キャンプはモレーンに挟まれて狭いが、風が弱く穏やかな場所だ。我々のような小さな隊にはちょうど良いベースキャンプだ。もちろん我々以外にティリチミール登山隊はおらず、この夏にヒンドゥークシュにいた遠征隊はイストルオナールにハンガリー隊、サラグラールにスペイン隊と我々の合わせてたった3隊だけだった。

ベースキャンプからは遂に目指すティリチミール北面が望めた。といっても実際見えているのは頂上付近だけで、北壁の全容は見えていない。手前の6,000m峰が要塞の壁となって山頂以外はベールに包まれている。それでも、初めて目指す北壁の一部が見えて、興奮気味である。

翌日は準備し、7月4日より偵察と順化を始める。急がば回れは、その名の通り要塞をぐるりと回り込んで、北壁の取り付きとなる下部ティリチ氷河源頭の最低コルを越えて取り付くプランだ。門のアイスフォールが通れなくなった今、唯一残された手段だ。最低のコルと言っても、北峰と西峰Ⅳ峰の鞍部で、標高は6,200m。そう易々と乗り越えられるほど甘くはない。もちろん今までそんなコルを目指して登った隊もいないので、情報や写真がない。BCからはモレーンを横断して大屈曲部から氷河に上がる。右岸沿いのモレーンを登り、クレバスが多く割れてきたら中央寄りに移って再びモレーンを登る。モレーンの末端をC1（5,400m）とした。このキャンプは雪上では無く堆積物の上なので暖かく、水も流れていて快適だ。

翌日からノーマルルートから外れ、最低のコルにつながる谷へ入る。入り口のアイスフォールを左岸から回り込み、プラトーを進むと岩と雪のバンドにぶつかる。右岸寄りからミックス帯を越えると、急峻な氷雪壁となる。西面に向いているためか、氷が硬く、滑落は許されない。150mほど登ると最低コルに到着。遂にティリチミール北壁が姿を現した。衛星画像でしか見ていなかったので、本当に取り付くことができる北壁が存在しているのかが確信できなかったが、一目見た瞬間、そんな不安も一掃された。何度も見た衛星画像の北壁が、ほぼ同じ姿で目の前に聳えている。ただ、全ての不安が解消されたわけではない。コルから先の下降が雪庇によって見えて

いないからである。登りよりも下降の方が急なのは間違いない。

7月10日、2回目の偵察と順化へ出発する。今回はコルから実際に下降することと、登頂後の下降路の偵察が目的だ。2回目なので順化は出来ているが、動きは鈍い。なぜなら今回はFixロープを背負っている。近年、我々はフィックス・ロープを使わない登山をしていたので、ベースキャンプにすら持ち込んでいなかったが、今回は懸垂下降して取り付く可能性が高かったので、初めてフィックス・ロープを持参していた。万が一北壁が登れずに敗退した場合でも、アプローチで下降した絶壁を登り返せるように、傾斜がきついところだけフィックスすることにした。重いと言っても50m 4本。6,200mのコルから下の氷河までは約700mの高度差があるので、これで足りるかは降りてみないと分からない。

いざ要塞を越えて下降する。コルに上がるまでの西面に比べ、要塞の中は風が無く暖かい。雪もグサグサで水が流れているところもある。浮石が多く、ロープを切らないように慎重に下降する。たった200mではもちろん氷河まで下降することは不可能だが、下降ルートをほぼ確認することができたので、氷河に降り立つ算段がついた。

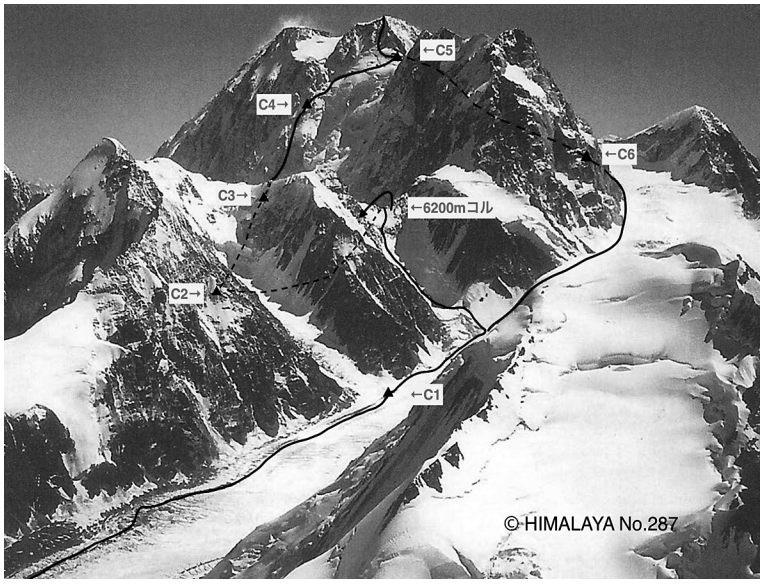
次は北壁を登り切った後の偵察だ。今は上部ティリチ氷河を詰めて登るのが一般的で、6,600mまでは氷河を辿れば技術的に難しい箇所はない。その代わり、クレバスは至る所に割れており、ヒドゥンクレバスも多く潜んでいる。登頂後は疲れ切った状態で下降するのが目に見えているので、少しでもリクスを下げるために、しらみつぶしにルート上のクレバスを確認し、視界が効かなくても下れるようにGPSでトレースを残した。この日は氷河を詰めて6,300mで幕営。国境が近く、アフガニスタンの乾いた山々に夕日が沈むのを眺めることが出来た。初めての標高での宿泊だったが、今回は不思議と調子が良い。順化的には少し不安ではあるが、後は登りながら順応してゆくしかない。

7月13日、2回目の順化と偵察を終えてベースへ戻った。後は最終アタックを残すのみとなる。衛星端末のinReach mini 2を使って、インターネットに出ている週間天気予報を日本から送ってもらう。ヒンドゥークシュ山脈は他のエリアに比べて夏は基本的に天気が良い。入山してから天候の大きな崩れはなかったので、天気待ちをする日が無かった。天気がいいだけではなく、暖かい。今年はエルニーニョ現象で世界的に気温が高いのもあるだろうが、日差しが強く、気温が暖かいので、みるみるうちに氷河が溶けている。実際またいで通過できたクレバスが、次来た時はジャンプ、そのまた次は通れないということも日に日に起きている。さて、天気予報の方はというと、珍しく大雪予報が出されていた。ちょうど休養中に過ぎ去る予報なので心配は無いものの、積雪量次第では出発が遅れる可能性があるので心配だ。

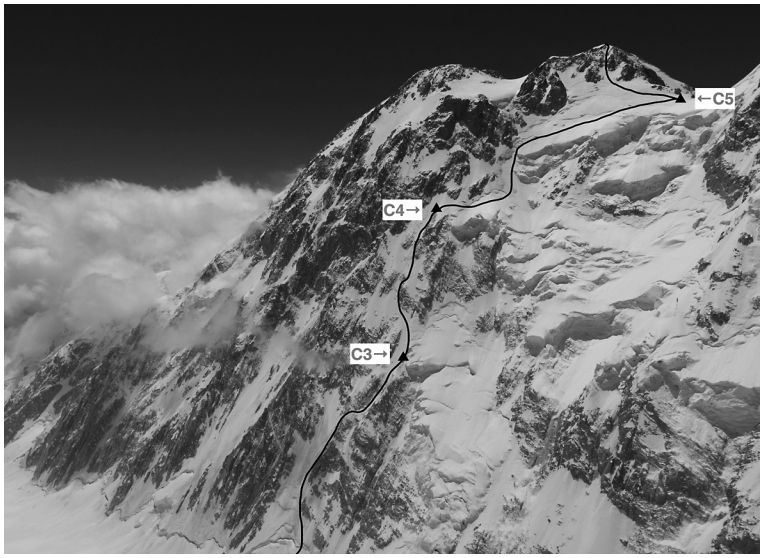
7月16日、未明から雨が降っている。今回のパキスタンで初めての雨だ。標高は4,600mだが、気温は4℃でいやに暖かい。降ったり止んだりではあったが、一日中スッキリしない天気だ。問題はその夜に起こった。美味しい夕食に満たされ、各自テントに戻り眠りにつく。深夜0時ごろ、突然川の音で目が覚める。残念ながらベースキャンプには水場が無く、往復10分かけて水を汲みに行くので、水の流れる音なんて聞くはずがない。しばらく、気にせずうたた寝していると、テントの床が浮いてきた。完全にテントの下に水が流れていることに気づく。慌てて飛び起きて外に出ると、今までなかった水の流れがベースキャンプのど真ん中を走っている。幸い雨が止んでいたが、これ以上浸水しないように、深夜の土方作業が始まった。一昨日降り続いた雨が時間差で襲っ

てきたのであった。

休養中はアタック準備をする中で、装備や食料はもちろん、我々にとって重要な作業がある。それは充電だ。山岳カメラマンでもある我々は、登攀の様子を撮影している。必要ないと言えばそれまでだが、誰も見たことがない場所へ行けるチャンスなんて早々あるわけではない。少しでもその光景を伝えるために、撮影機材も装備の一部として組み込まれている。1ｇでも軽くして登りたい気持ちは同じだが、最低限のコンパクトカメラとアクションカムを今回は持っていくことにした。結局、大雪予報はそこまで大したことがなく、４日間のレスト明けで出発することになった。ところが出発前日の夕食後、中島が急激な腹痛に襲われる。原因は不明だが、夜には悪寒と喉の痛みまで出てきた。翌朝には熱は下がったものの、喉の痛みが続いている。北壁まで２日間かかるのでそれまでには良くなることを願ってベースを後にした。



写真②ルート図１



写真③ルート図２　提供/石井スポーツ

７月18日　BC（4,600m）→ C1（5,400m）

予定通り出発する。通い慣れた氷河だが、さらに大きくクレバスが口を開けている。妖精を守る大カエルに食べられないよう注意しながら進む。

７月19日　C1（5,400m）→
6,200mコル→ C2（5,500m）

気温は－６℃で前回よりも７℃上がっている。雪解けが心配だ。6,200mのコルからいよいよ下降を開始する。前回フィックスしたロープは登り返せないところだけにセットし直して、あとはクライミング・ロープで下降していく。ルンゼ地形に入る場所があり、その中で一度ピッチを切る。目の前を水が流れているので、水でも汲もうかなと思った瞬間「ドサッ」と鈍い音。直後に「ラクッ！！」という叫び声。見上げると氷や岩の塊が頭上一面に広がっている。身の危険を感じて一瞬スローモーションにみえたが、避けられるほどの数ではない。ルンゼ内で落下物が集中して落ちてくるので、できるだけ避けるように真横の岩に密着した。幸いにも脛に小さな岩が当たった程度で、ロープが切れることも無く、二人とも無事であった。原因は雪庇の崩壊による落石。心配していたことが的中してしまった

が、登山を中止するほどのものではなかったのが不幸中の幸いだ。結局、水を口にする暇すらなく、喉をカラカラにしながら、１秒でも早く安全地帯に降りることだけを優先した。合計８ピッチの懸垂下降で下部ティリチ氷河へ降り立った。ここまで来たら敗退するのも容易では無い。あとは無事山頂を登って安全なルートで帰るまでだ。とりあえず雪を溶かして水分補給して、北壁の取り付きへ向かう。要塞の中はラッセルする我々の足音だけで、風もなく静かだ。一歩一歩北壁へ近づくと、見えていなかった部分が見えてくる反面、近づきすぎると壁全体は見えなくなる。あとは実際に現場に行って確かめるしかない。ところどころクレバスが開いているが、比較的安定している氷河だ。壁の取り付きでテントを張って、翌日に備える。

７月20日　C2（5,500m）→ C3（6,150m）

夜明け前に雷の音で目が覚める。近くはないが、ゴロゴロと雷鳴が轟いている。連日の晴れで地表の温度が上がっているためか、大気の状態が不安定になってきている。下層に溜まった雲で辺りが真っ白ななか、いよいよ北壁のクライミングが始まる。しばらくは氷雪壁なので同時登攀でスピードを稼ぐも、傾斜が急になってくるとリードとユマーリングに切り替えて進む。北壁だからカチカチのブルーアイスかと思いきや、実は日中の間ずっと太陽の日が当たる北壁であった。氷の状態もよく、跳ね返されるような硬い氷では無かった。

３時間ほど登ると岩のバンドにぶつかる。岩を正面から突破するには傾斜がきつく、時間がかかるので右にトラバースして迂回路を探すことになる。視界が悪いためイマイチ自分たちの位置が掴めない。一番手前でトラバースしてみたら、ルートはスッパリ切れ落ちていた。再度戻って、一番可能性のあるドンつきまで進み、右にバンドをトラバースして岩尾根を回り込むと、右のルンゼにつながるラインを発見。引き続きトラバースを続け、無事ルンゼに入り、再び氷雪壁を直上。３時間ほど登ると、予定していたビバーグ・ポイントについた。急傾斜の北壁だが、セラックの真横で傾斜が少し落ちている。少し雪を掘ってみると、やはりすぐ氷が出てきた。そこで今更ながら今回初めての新兵器、アイスハンモックの出番だ。少し改良した軽量ハンモックをスクリューで雪面に固定して、雪や氷を溜めてテラスの幅を拡張するアイテムだ。いつも通り氷の斜面をアイスアックスで２時間掘削したとしても、テントの３分の１が浮いているテラスが限界だ。ところがこのハンモックがあると、30分ほどで素晴らしいテラスが完成した。昔ならお座りビバーグでも十分だと思っていたが、年と共にいかに回復するかが重要となってしまった。横になって寝られるに越したことはない。



写真④北壁にて　提供/石井スポーツ

７月21日　C3（6,150m）→ C4（6,750m）

高度順化しているはずの標高だが、中島は頭痛であまり眠れなかった。周囲は雲海が広がり、美しい朝の出発となった。氷雪壁を左上気味に登りだす。しばらくすると岩のルンゼに入る。直上は傾斜が強く支点が取りにくいので、右へトラバースして回り込むと、雪面に上がれた。しばらくすると２つ目のルンゼに入るが、こちらは氷がつながっているので

左上気味に突破。雪が降り始めてきたが、さらに右上すると小尾根に合流。尾根の末端部を削れば良いテント場になるので、今日は14時に行動終了。再びアイスハンモックを使用して快適なテントサイトを作成した。アフガニスタンに沈む夕日が美しく、明日の好天を約束してくれているかのようだ。

7月22日　C4（6,750m）→ C5（7,200m）

今朝は雲海に包まれて出発したが、すぐにガスが抜けて暖かい日差しを受ける。今日は見えていなかった懸垂氷河の通過となる。ここさえ越えることができれば、引き返すことはなくなる。逆に言えば、ここが越えられなければ、長い退却の道のりとなってしまう。トラバースして懸垂氷河の端まで来て見上げる。急傾斜ではあるが、岩と懸垂氷河の間に氷のルンゼがつながっているように見える。日陰に入り、気温が急に下がって氷は固くなるが、気持ちよくアイススクリューが決まるので心配無い。弱点をつなぎ、右上すると無事懸垂氷河上のプラトーに出た。残すは頂上岩壁だけだが、今日中の登頂はさすがに厳しい。すでに標高は7,000mを越えているので、あまり標高を上げての宿泊は避けたい。まだ昼前で時間があるので、翌日の下降をスムーズに行えるように、ノーマルルートと合流する西峰のコルに最終キャンプを張ることにした。コルは風が抜けるのでスノーブロックで防風対策をする。真っ赤に染まる山頂を眺めて就寝。

7月23日　C5（7,200m）→
山頂（7,708m）→ C6（6,300m）

いつも通り4時15分起床。気温は－18℃で、今までで一番冷え込んでいるが暖かい。中島は頭痛と喉の痛みで快眠では無かったが、過去に比べて高度障害は少ない。今日は今までで一番の晴れに恵まれ、テントに陽を浴びてから出発。頂上にダイレクトに出るルンゼまでトラバースしてミックス壁を登る。傾斜はあるが、クラックにプロテクションがしっかり取れるので快適なピッチ（60m）だ。急な氷雪壁が続くが、荷物は軽いので同時登攀で進むと頂上稜線へ出た。あとは歩いていけそうだが、偽ピークがいくつかあるのがセオリーなので、期待せずに一つ目の雪のピークを登ると、そこがリアル山頂だった。



写真⑤山頂にて　提供/石井スポーツ

午前9時35分、ヒンドゥークシュ最高峰に立った。第2のノシャックや第3のイストルオナールも、綺麗に見下ろせる。南方面の眼下にはチトラルの街が見えた。登ろうと計画してから5年の歳月が経ったが、ついに登り切ることができた。写真を撮ったり、ベースキャンプへ連絡を入れたりと、あっという間に時間は過ぎる。40分ほど経って下降を開始する。岩場は2ピッチ懸垂下降し、トラバースして最終キャンプに戻る。登頂が早かったので、キャンプに戻ってきてもまだ昼の12時だった。天候・体力ともにまだもちそうなので、できるだけ下降することにした。この先は過去の記録を頼りに、岩のクーロアールに入る。残置ロープやハーケンが至る所に残されており、登攀の厳しさが伺える。6ピッチほど懸垂下降を繰り返し、上部ティリチ氷河に降り立つ。あとは時間の許す限り下降し続け、順化時に泊まった6,300mまで下ることができた。下降した時の為にと雪の中にデポしておいた食料と燃料も回収し全てが

順調。

7月24日　C6（6,300m）→ BC（4,600m）

偵察しておいた氷河を下るのでスピードは速い。昼にはベースキャンプへ到着した。

7月26日、ベースキャンプからは1日でショグロムへ下山。翌日にはチトラルへ戻った。どこから情報を得たのか、帰り道では至る所で祝福された。首には下げられないほどの首飾りをかけてもらい、ヒーローかのようにお祝いをしてくれた。その中で、一つ嬉しい出来事があった。孤児院を訪れ歓迎された時、子どもたちに「あの山に登ってきたんだよ」と指して、山頂の写真を見せてあげた。まさかいつも見上げるあの山に、人が登るなんて考えたことすらないような反応だったが、登頂写真と目の前に真っ黒に日焼けした人が立っているので理解してくれたようだ。その中の一人だけだが、「僕もあの山に登ってみたい！」と手を挙げてくれた子がいた。こんな嬉しいことがあるだろうか。自分たちだけではなく、たくさんの人のおかげで登ることができた。そして、さまざまな人が喜んでくれ、とても大きな励みとなった。

最後に、孤児院の校長から一つ質問があると真面目な顔で聞かれた。「山頂に妖精はいましたか？」と。



写真⑥下山後に出会った子どもたち　提供/石井スポーツ